

【7月の気象】

7月は、「梅雨明け」という季語があります。四国地方の梅雨明けの平年は7月17日頃です。梅雨末期となる7月前半は前線の活動が活発化し、大雨となることがあります。

梅雨明け後は、「炎暑」「熱帯夜」という季語にあるように、太平洋高気圧に覆われ、晴れて暑い日が続くことが多くなります。最高気温40℃以上の日の名称を、アンケート結果などから新たに「酷暑日」と決定しています。熱帯夜の日数もこの頃から多くなり、年間の日数は増加傾向が見られます(表1)。昨年7月の熱帯夜は、松山が14日、宇和島が12日ありました。

気象庁と環境省は、熱中症の危険性が極めて高い暑熱環境が予測される場合に、暑さへの「気づき」を呼びかけ国民の熱中症予防行動を効果的に促す「熱中症警戒アラート」の運用を行っています。熱中症予防にご利用ください。

環境省の熱中症警戒アラートのページアドレス
<https://www.wbgt.env.go.jp/alert.php>

表1 近年の熱帯夜日数(松山、宇和島)

	松山	宇和島
1991～2000年	19.8	12.0
2001～2010年	28.2	17.3
2011～2020年	30.5	21.4
2021年	18	10
2022年	46	37
2023年	40	36
2024年	58	46
2025年	56	49

※熱帯夜の日数は最低気温25℃以上で表示
(2020年以前は10年間の平均値)

【気象用語】線状降水帯

毎年のように全国のどこかで記録的な大雨により災害が発生しています。ニュース等で線状降水帯の言葉が聞かれることも一般的になりつつあります。

線状降水帯は、次々と発生した積乱雲により、線状の降水域が数時間にわたってほぼ同じ場所に停滞して大雨をもたらすものです。気象庁では線状に伸びる長さは50～300km程度、幅は20～50km程度で、強い降水をともなう雨域を線状降水帯としています(図1)。

線状降水帯が発生すると、災害の危険性が急激に高まることから、発生する可能性がある、半日程度前の段階で「気象解説情報(線状降水帯半日前予測)」を府県単位(愛媛県)で発表します。この段階では即時の避難を促すものではなく、大雨災害に対する危機感を早めにもっていただく情報になります。

線状降水帯の可能性が高まった際には、発生2～3時間前を目途に「気象防災速報(線状降水帯直前予測)」として発表します。非常に激しい雨が降り続く可能性が高まった場合に発表されますので、動けるうちに適切な防災行動を少しでも早くとってもらうことが重要となります。この情報は、中予・東予・南予で発表します。

また、線状降水帯予測マップ(図2)として、メッシュ情報を提供します。大雨のおそれのある大まかな領域をホームページに公表するもので、赤色の領域が線状降水帯直前予測の領域に対応している訳ではありません。

線状降水帯が発生した場合には、「気象防災速報(線状降水帯発生)」を発表し、大雨による災害発生の危険度が急激に高まっている状況をお伝えします。気象庁ホームページの「雨雲の動き」(図3)や「今後の雨」では、線状降水帯の雨域を赤色の楕円で大まかに確認することができます。その外側の地域でも、大雨による災害発生の危険度が急激に高まっているおそれがあることに留意が必要です。また、描画ボタンの選択(表示/非表示)により、30分先までの予想を赤の破線で表示することも可能です。

令和2年7月4日6時までの3時間雨量(解析雨量)

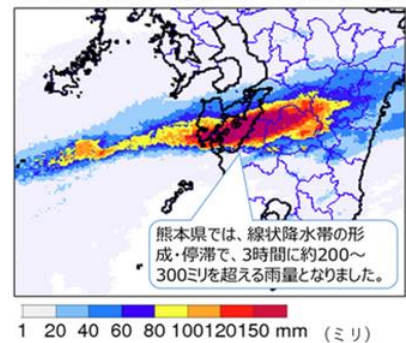


図1 線状降水帯の発生例

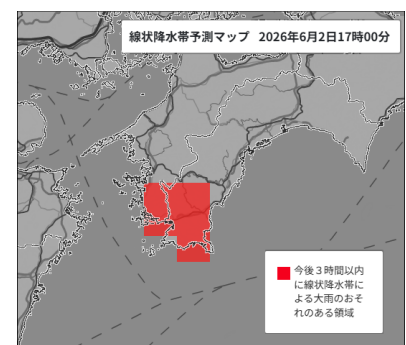


図2 線状降水帯予測マップの例

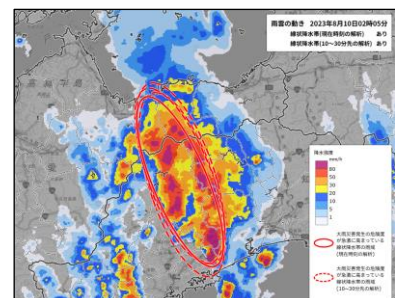


図3 線状降水帯発生時の描画例